

# 図書館だより

都城工業  
高等専門学校  
図書館

No. 76

FEBRUARY 2015



ヘインサ コリョバルマンテ ジャンギョン  
「韓国 海印寺の高麗八萬大蔵経」

特集

## 校内読書感想文コンクール入賞者発表

都城工業高等専門学校

Miyakonojo National College of Technology

乏しき時代の読書	図書館長 望月高明	1
鉄は熱いうちに打て、本は若いうちに読め		
	機械工学科 小薮国夫	4
20代のころ	建築学科 板倉和則	5
Is this seat taken?	一般科目(文科) 崎山強	6

## 特集

# 校内読書感想文コンクール入賞者発表

校内読書感想文コンクール入賞作品		7
講演会「動物行動のシミュレーション」		
	講師 宮崎大学副学長(理事) 岩本俊孝氏	19
今年度の活動と図書委員会の在り方について		
	学生図書委員長 電気情報工学科 仲澤知剛 副委員長 機械工学科 郡勇人	21
ブックハンティング実施される		21
第二回「深山書評」実施される		22
〈ブックハンティング〉で購入した図書一覧		23
図書館からのお知らせ		24

図書館開館予定  
 学年末・春季休業期間中の長期貸出について  
 図書館長の交代について  
 編集後記

### ●表紙「韓国 ヘインサ コリヨバルマンテジャンギョン 海印寺の高麗八萬大蔵経」

韓国中南部の伽耶(カヤ)山の南麓に建つ海印寺(ヘインサ)は、1200年の歴史をもつ韓国三宝寺刹のひとつである。

大蔵経とは、仏教の経典・論書・註釈書をまとめたもの。3年間海水に浸した白樺材をさらに3年間乾燥させた版木の上に、経文(一面に約300字)を精巧な技術で彫り込んでいく。こうして、高麗時代1236年から約15年かけて完成された版木は、全部で81,258枚。

海印寺の八萬大蔵経は、現存する大蔵経の中でも最高峰とされ(世界記録遺産)、8万枚超の版木が境内の「大蔵経板殿」(1488年創建)の中に、保管されている。湿気を防ぎ通風を良くするために工夫されたこの板殿(建物)も、世界文化遺産に指定されている。

この板殿の校倉造りのような格子から、初めて大蔵経の版木を覗いた時の驚きと感動は今でも忘れ難い。長い時を経て保管されてきた大蔵経板の圧倒的な量。その版木一枚一枚に彫られた力強い文字。そこに、活字に対する人間の熱き思いが、ほとぼしっているのを見たのだ。活字の力、本のもつ力を、君たちにも信じて欲しい。私の最後の「図書館だより」に掲載した所以である。

撮影 図書館長(一般科目) 望月 高明





# 乏しき時代の読書

図書館長 望月高明

一

図書館長としての役務柄、私は学生に読書すること、殊に良書に接することの大切さを絶えず説いてきた。これこそが私が4期8年間、倦まず反復して已むところのなかったことであるといっても過言ではない。しかるに、昨年12月初旬に放送されたNHK「クローズアップ現代」で示された数字は、非常に衝撃的であった。それによると、今や国民の2人に1人が1年間に1冊も本を読まないということであった。そして、その一因がスマートフォンやインターネットに多くの時間を費やして、その分だけ読書の時間が確保できないということであった。

この事実については既に冬休み前の集会で報告し、また「学園だより」でも論じていることであるが、話の緒としてこのことから始めるとしよう。すぐ上で私が学生に読書することの大切さを繰り返し説いてきたといったが、「クローズアップ現代」の放送に接したとき、今更ながらに私は私自身が恐ろしく凄まじい現実を相手としていたことに気付いた。その時、「ああ、ここまで来たのか」「来るとここまで来たのだなあ」という感慨を抱いたことも事実であった。その「恐ろしく凄まじい現実」の正体が、どのようなものなのか、実のところ私には判然としない。かえって、それだからこそ恐ろしく不気味なのである。私のこの感覚は「クローズアップ現代」で紹介されていた、ある私立大学の図書館スタッフの言と一脈相通ずるものである。その大学では1年間に凡そ13万冊の図書が学生に借り出されているということであるが、近年では毎年借り出される図書が1万冊ずつ減少しているという。続けて、その人が「この現象はもはや若者の活字離れなどという生易しいものではない」と言って、危機感を露わにしていたのがとても印象的であった。

恐らくその人などは大規模な図書館に長年専門スタッフとして勤務していて、滔滔として進行している苛烈な現実を、敏感に肌で感じ取っているのかも知れない。私は預言者などではないから将来のことはもちろん分からない。しかし、国民の2人に1人が1年間に本を1冊も読まない現実がこれから先数十年も続いたら、いかなる事態が生起するのだろうかと思う。むしろ、私は「その後」に生起することの方が恐ろしい。現在はまだそういう事実がやかましく言い囃されたところで、まだその端緒に立っているに過ぎない。どこいあまり目立たないだけで、孜々として日々読書に励んでいる人は思いのほかたくさんいるはずである。であるから、私はそういう凄まじい数字を示されても、余り悲観しようとは思わない。しかし、スマートフォンやインターネットに象徴される情報通信技術は文字通り世界的規模において普及していて、それ自体高度な普遍性を獲得していて、一切の例外を許さない。

なお、小文では行論上、スマートフォンやインターネットの普及が、国民の活字離れを助長しているものとして負の側面がクローズアップされているが、私は情報通信技術の発達を頭ごなしに否定するものでは固よりない。そのことの普及がかつてない広大な知の地平を開きつつあることは、何といっても争えない。しかし、それにもかかわらず私が危惧するのは、上述したごとく情報通信技術の世界的規模における普及の後に来たるドラステックな現実には他ならない。

二

以下では近年、私が論文で扱った2人の思想家をあげて、右の問題について考える手掛かりとしよう。2人の人物とは、1人は大橋<sup>とつあん</sup>訥庵であり、そして他の1人は大塚<sup>たいや</sup>退野である。

私の眼前に一冊の古びた写本がある。一部は虫損の、和紙で綴じられたものである。表紙には『大橋順蔵上書』と表題が記してある。しばらく前に東京の古書店の目録の中に見出したものである。大橋順蔵（順蔵は訥庵の通称。1816～1862）といっても、現在の人は幕末維新の歴史に関心を持った者でもなければ、ほとんど知らないに違いない。また、今では彼が『關邪小言』（4巻）の著者といったところで、ほとんど同じことであろう。因みに同書の稿が成ったのは嘉永6年（1853）であったが、その執筆動機について、訥庵は宮川嘉兵衛宛の書簡で「近年洋学流行、神州の元気を損傷致候を憤激の余り、自己の固陋をも不顧、關邪小言草定仕候。折柄癸丑の六月夷船渡来云々」と述

べている。

訥庵は幕末昌平黌の儒官として幾多の人材を養成して学界の泰斗として仰がれた佐藤一斎の高弟である。ただ、彼は晩年、強い危機意識から学者（朱子学者）でありながら、政治的傾斜を加速させて、公武合体反対、輪王寺宮擁立などの尊王運動に参画し、文久2年の坂下門の変に連座して下獄、出獄後急死した人である。

私が架蔵する上記『大橋順蔵上書』には2本の文（上奏文）を収録する。1本は「浦賀表御防禦之義ニ付今日之急務愚存之趣奉申候書取」（嘉永上書）、そして、他の1本は「異国船渡来之義ニ付又々愚存奉申候書取」（安政上書）という文である。「嘉永上書」は37丁と非常に長大なものである。なお、「安政上書」は9丁から成る。ここではその内容について云々することが目的ではないから立ち入ることはできない。しかし、前者が嘉永6年7月に米国東インド艦隊司令長官ペリーが軍艦4隻を率いて浦賀に来航したことに触発されて執筆せられたものであり、後者は翌安政1年に、ペリーの率いる軍艦7隻が来航したのを契機に成ったものである。

そして、私が力一杯主張したいことは、未曾有の民族的危機を眼前にして、幕末の志士たちが訥庵の上奏文を争って読んだという事実である。読むといっても、現在のようにワープロやコピー機などの文明の利器などないから、一字また一字と丹念に筆写しなければならなかった。しかも、37丁（ページ数に換算すると63ページに相当する）と非常に長大で、筆写するといっても恐らく一ヶ月余りを要したであろう。そして、両文は写本のまま広く天下に流布した。私が入手したのはこうして天下に流布した中の1本にすぎない。私の架蔵本には「精齋図書」の印が捺されているが、精齋なる者がいかなる経歴の人物であるのか、詳らかにしない。ただ、その書が一字一字実に丹念に筆写されていることは、写真を通して窺うことができるであろう（写真1）。

このように、今からわずか160年ほど前の先人たちは、本当に読むに値する書物であれば、筆写の労も厭わないで苦心して読もうとしたのだった。

### 三

次に大塚退野（1677～1750）について少しく述べるとしよう。熊本に実学思想というものがあつた。それは元禄末年から明治初年まで、165年前後にわたつ

ている。そして、退野はその領袖である。大塚退野といっても、地元の熊本の人ならともかくとして、現在ではほとんどの人がその名前すら知らないであろう。幕末維新期の経世家横井小楠（1809～1869）が「拙子本意専此人を慕ひ学び候事に御座候」といって、終生その人を師として仰いだ人であるといえ、少しは関心を引くかも知れない。ともあれ、退野は28歳の時に朝鮮の儒学者李退溪の『自省録』を読んで、程朱学の意味を暁り、それまで奉じていた陽明学を脱然と棄てて、程朱学へと転入した。ここで注意を要するのは、退野が1冊の書物（彼の場合は『自省録』であった）を読んで、陽明学を棄てて程朱学へと転回したという事実でなければならない。彼にとって陽明学を奉ずるか、朱子学を奉ずるかは、文字通り「あれか—これか」という全人格を賭してその一を選び取る生命の問題であつて、ファッションや装飾品のように気軽に着脱できるものではなかつた。

しかし、私が退野について主張したいと思うのはこのことではない。その一事とは、退野が40歳の頃『朱子書節要』20巻（20巻である！）を手ずから筆写するに至つたという事実である。『朱子書節要』は退溪が『朱子文集』121巻の中で、最も感動を誘うものは書簡であるとし、その繁を削り簡を選んで、朱子の思想の真髓に直に触れさせるべく、十数年の歳月をかけて編纂したものである。それにしても、『朱子書節要』が“天下の孤本”というなら話は別だが、例えば同書の江戸時代刻本に限つても、彼が生まれる以前にすでに2本が、またその在世中に1本が刊行せられていて、広く巷間に流布していたものである。そして、退野の財力からいって、これらの諸本が入手不可能だつたとは到底考えられない（因みに彼の家は代々熊本藩の世禄の臣にして、禄高200石であつた）。

であるから、退野はなぜあの浩瀚な『朱子書節要』を手ずから筆写するに至つたかということが、依然として問題でなければならない（因みに、私はこのことの究明を「退溪学を形成するもの（序-I）—『朱子書節要』の史的地位—」なる小論で試みている）。退野の筆写した『朱子書節要』が現存しているのか、私は詳らかにしないが、恐らく亡失してしまったのであろう。そういうわけで、実はそれがいかなる体裁のものであるかは不明である。しかし、この話にはまだ続きがある。一昨年3月、私はソウルの成均館大校「尊経閣」で閲覧していた幾つかの『朱子書節要』の版本の中に、同書の写本を見出したのだつた。そして、その時直ちに朝鮮にも一退野がいたと思つた。同



書には柳成茂（1848～1926）なる人物の印が捺されているが、恐らく筆録者の名であろう。なお、尊経閣のご好意により写真を掲げる。既に『大橋順蔵上書』がそうであったように、写本『朱子書節要』が1字1字実に丹念に筆写されていることが窺われるであろう（写真2）。ここでも、彼がなぜあの浩瀚な『朱子書節要』を筆写するに至ったかということが、問題でなければなるまい。しかも柳成茂なる人が没したのは1926年と時代がなお近いということは、読書という行為を考える上で、やはり何事かを強烈にわれわれに訴えかけているであろう。

#### 四

上来、大橋訥庵の上書2本、並びに大塚退野の『朱子書節要』筆写という行為を取り来たって論じたのであるが、私は固より先人に倣って、われわれも筆写の労に服すべきなどと時代錯誤的なことを言おうとしているのではない。ただ、先人が本当に読むに足る書物については筆写という恐ろしく手間のかかる行為も厭わずに読もうとした事実を指摘しようと思ったにすぎない。それにしても、冒頭に指摘したごとく、今や国民の2人に1人が1年間に1冊も本を読まないという現実が、必要とあらば筆写してでもその書物を読もうとした先人の精神から遙かに遠いものであることは覆うべくもない。われわれは何とまあ貧しくけち臭い精神になり下がってしまったのであろうか。

小文を終えるに当たって、前出の佐藤一斎の言葉をあげるとしよう。

余、年少の時、学に於いて多く疑有り。中年に至りても亦た然り。一たび疑の起る毎に、見解少しく変じ、即ち学の稍や進むを覚ゆ。近年に至るに及んで、則ち絶えて疑念無し。又た学も亦た進まざるを覚ゆ。乃ち始めて信ず、白沙云う所の疑は、覚悟の機なりを。斯の道は無窮、学も亦た無窮。今老いたりと雖も、自ら厲まざるべけんや。（『言志晩録』）

右の一斎の文は、学問とか学問することにおいて、疑問を持つことがいかに大切であるかを論じたものである。これによれば、疑問をもつことは学問を進展させる根源動力といってよい。「大疑現前」、「大疑の下に大悟有り」とは禅宗の常套語であるが、学人の修学において疑問が重要な契機をなすことは、何も禅の専売特許とは限らない。しかるに、1年間に1冊も本を読まないで、どうやって疑問をもつというのだろうか。ここでいうところの「疑問」とは、すぐ上で述べたごとく「大疑」、すなわち人間存在の根柢に係る大いなる疑問のことである。その疑問がわれわれを本当の自己の覚醒へと導くようなそれである。そして、私は読書という行為がそれへと我々を導くところの有力な手段であることを疑わない。ドストエフスキーや夏目漱石、その他の作品に触れることは、われわれに人間存在の根本にある問題に戦慄せしめる機会を与えるであろう。そして、そういう経験を潜り抜けることなくしては、われわれの生は奥行きを欠いた平板なものに墮してしまうのではないだろうか。私は読書することの大きな意義というのは、かかる点に見出すことができるのではないかと思う。

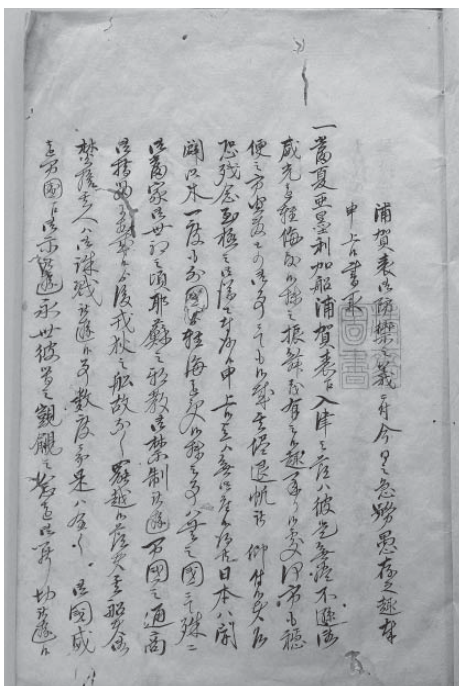


写真1

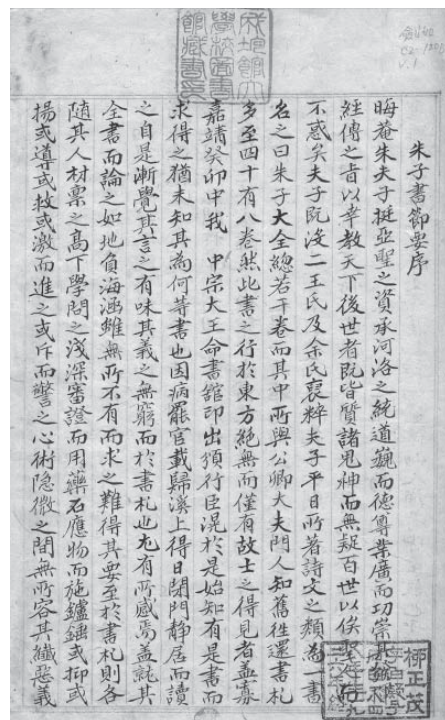


写真2

# 鉄は熱いうちに打て、本は若いうちに読め

機械工学科 小 藪 国 夫

本を読むことが好きで、いつも1、2冊の本を鞆に入れて持ち歩いている。そして電車やバスに乗っている間や、何かを待っている間など少しでも時間があるときよく読んでいます。このような状況の中で本を読んでいるから、たいてい上体が何かにもたれていたり変に傾いたりして、知っている人には決して見られたくない姿勢である。本は片手で持つことになるのであまり重くない文庫本か薄い単行本を選び、内容は気軽に楽しめる推理、怪談、歴史関係の小説が多い。都城に来て14年が経つが、本校の図書館から毎年夏休みと冬休みには5、6冊の本を借りて返却までに読み終えている。三股町の図書館にも開館当時からよく通っていて、年間に読む本の数は若い頃と今とではそれほど変わっていない。

このような本を読む習慣がいつ頃始まったのか過去を振り返ってみると、小学4、5年の時に読んだ2冊の本「世界の七不思議」と「怪談鍋島物語」に行き当たる。どちらも小学生を対象に書かれた本なので、文章は優しく表現されており、分量もそれほど多くなかった。しかし、その内容から受けた強烈な印象は50年経った今もはっきりと思い浮かぶ。例えば、世界の七不思議では現在の土木工事で普通に使われる重機類が存在せず、人と家畜の力だけに頼るしかなかった社会状況の中で、どのようにしてあの巨大石造建築物が建設されたのか不思議でならず、頭の中ははてなマーク(?)とびっくりマーク(!)で一杯になった。これをきっかけに自然・科学に興味を持ち理系を志望するようになったのは、恐らくこの本が原因ではないかと考えている。

一方、怪談鍋島物語は佐賀藩主鍋島公が囲碁上の戯れから臣下竜造寺氏を斬殺し、それを恨んだ竜造寺氏の母親が自害し、その時に母親が可愛がっていた猫が母親の血を舐めその恨みを晴らそうと鍋島公を苦しめる、という筋である。この本を読むきっかけは、放課後、一緒に帰るために友達を待っている間の時間つぶしとして、教室の後ろの小さな本箱にあった1冊の本を手にとって何気なく読み始めたことである。本を読み始めた時、教室内にまだ数人の友達が残って騒いでいたが、本を読み終えた頃には一人も居なく周囲は薄暗くなっていた。本の筋書きと薄暗い教室に一人だけ

になっていたことから恐怖は最高潮になり、このときの情景は強く印象に残っている。そして、肝心の待っていたはずの友達と一緒に帰ったのかどうかについては、全く記憶から消えてしまった。

この体験をきっかけにして、本を読む習慣がついたのである。ところが、最近、困ったことが二つ起きるようになった。その一つは、昨年借りたことを知らずに同じ本をもう一度借りて、半分読み進んだところで、ようやく以前に借りた本であることを思い出すのである。また、こんな経験もある。本屋である本の題名に惹かれて購入し読んだところ、その内容があまり面白いとは感じずに本箱の隅に放りこんだままにしてすっかり忘れてしまった。しばらくしてから、別の本屋で面白そうな題名の本を見つけ、早速、購入して読んでみたがその内容に余り興味が持てず、やはり本箱の隅に放り込んだままにした。そしてある時、本箱を整理していると同じ題名の本が2冊ずつ3組出てきた。つまり3冊が重複していたわけで、古い方の本は少し変色していることを除けば、いずれも汚れたり折り目が入るような損傷はなく帯も完璧で、そのまま書店の本棚に並べることができるのではないかと思われる状態であった。

もう一つの困ったことは、印象に残る本が少なくなったことである。年間10冊以上は読んでいるのに1冊あるかなしの状況で、最近読んだ本の中からお薦めの本を1冊挙げようとしても見つけられない。もし、先に挙げた世界の七不思議と怪談鍋島物語をこの年齢になって読んだとしても、50年前のような感動は到底起きないと思う。この困った出来事は50歳を過ぎてから起きている事なので、年齢に関係していることは明らかでこれを直すことは恐らく困難であろう。

以上より自分の体験に基づいて何か教訓を得ようとすると「鉄は熱いうちに打て」に引っ掛けて「本は若いうちに読め」ということになる。



## 20代の頃

建築学科 板倉和則

私は20代の頃、五木寛之の「青春の門」の登場人物、伊吹重蔵に憧れた。「あのような人間になれたらカッコよいのにな」、と思っていた。伊吹重蔵は、炭鉱の落盤事故で数十人を救うために自分の命を落とした人である。伊吹重蔵の息子が伊吹信介である。「青春の門」は伊吹信介の成長過程を書いたもので、全部で7巻あり、本校の開架書庫にも全冊そろっている。驚いたことに、高専に在任中に亡くなられた第6代校長高見沢徹一郎先生の寄贈となっている。高見沢先生は、この本の何に興味を持たれていたのだろうか、経歴を調べてみたい気になった。

伊吹重蔵は筑豊（田川市）で炭鉱夫であり、その息子が伊吹信介である。私の父も筑豊（山田市：飯塚市と田川市）の間に位置する日本で1番小さい市とその当時は呼ばれていた。）で炭鉱夫をやっていた時期（私が14歳になるまで）があり、恥ずかしい話だが、自分を伊吹信介に重ね合わせてしまうところがあった。また、私の父などが、いつ死ぬかも分からない所に身を置いているせいか、「筑豊の男はみっともないことはしたらいかん」というようなことを、自然と感じてきたように思う（特に筑豊を離れてから）。実際に自分が「みっともないか」というと別の話だが、確かに、自分は「筑豊の人間だ」ということが自分の重大な「心の支え」となっている。

話はそれるが、私は「薩摩の人間」というのにも憧れる。「薩摩の人間」は、質実、剛健、、、示現流なんてたまらない。鹿児島や都城で生まれていたら、それをポリシーにしていたかもしれない。ここで話題にしない他の地域の人には申し訳ないと思うが。

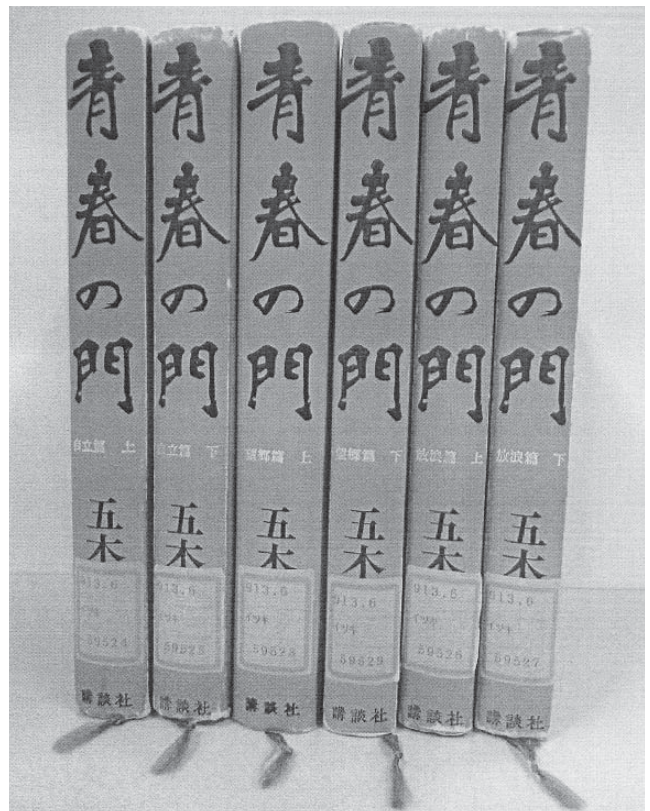
また、「葉隠の精神」というのにも憧れたことがある。「武士道とは死ぬことと見つけたり」。自分に都合のいい、うわべだけの解釈だと思うが、「何時でも死ぬる準備だけはしておけ」という風に捉えている。転じて自分では、「土壇場になった時にこそ、人間の価値はわかる」と思っている。これも、言い訳するが、私がそういうことができるという話ではない。

ただ、私の20代の頃に「そういうこと」に憧れていたのは間違いなく、一時期、「三島由紀夫の行動力」に畏敬の念を感じていたこともあった。

炭鉱町で過ごしなが、地元の高校を出て、公務員

にでもなれば「御の字」だな、と思っていたところ、ひょんなことから、長崎へ転校となり、結果として大学まで行くこととなった。卒業するころには、建築現場で働いて金をため、金貸しでもなれたら位に思っていたが、図らずも、都城高専の教員となってしまった。

それから40年、土壇場になるような事態もなく、平凡に暮らしてきた自分としては、「死ぬ時ぐらいい見苦しくなく死ぬるといいな」、と思っている今日この頃である。



# Is this seat taken?

一般科目 (文科) 崎 山 強

欧州では、どの大学も歴史が古く、創立は中世にさかのぼる。当然のことながら、図書館も古く、莫大な資料・文献がそろえてある。歴史ある欧州の大学が小生は大好きで、若い頃英国南部の *University of St. Mark and St. John* という大学に留学をした。

英国の大学では、まず学期初めにレポート・論文等の課題と提出日を告げられる。よって、自分の勉強のペースに合わせて、計画を立てていかねばならない。これが大変だ。ワープロもパソコンもない時代。論文は全てタイプライター打ちで提出する。修正液を一切使用してはならない。外国人の小生にとっては、これは、真にハードな勉強であった。

まず図書館に行き、莫大な蔵書の中から文献を探すことから始める。これが実は大変な作業なのだ。日本語なら縦書きなので背表紙も見やすい。英語は横文字なので、首を左に曲げないと背表紙が読めない。しかも言語教育関連の書籍は高い書棚にある。慣れるまで、暫くは首筋が痛い日々が続く。「肩こりに良く効くアンメルツよこよこを持ってくれば良かった」と後悔したことを、今でも鮮明に覚えている。

図書館は、いつ行っても満席で、なかなか席が空かない。学生さんは所狭しと書物をテーブルの上に置いている。実は何回も席を立つのが面倒なのだ。その時、よく使った表現が

*Is this seat taken?* (この席空いていますか?) であった。

まず、返ってくる言葉は、殆どが *No, we are very sorry.* (ごめん、空いてないのよ) だったことを思い出す。

いつも5、6冊文献を抱えて、図書館内を、うろろろしている小生を見かねて

*You are a professor from Japan, aren't you?  
This way, please!*

と言って、スタッフ専用の部屋へ案内してくれたのは、この人こそ、まさに図書館の *librarian* (司書) だったのである。小生にとって、この方は正に神に思えた瞬間だった。

*If you have any problem, don't hesitate to ask me.*

(困ったことがあったら、何でも尋ねてね) とまで

言ってくれたのである。異国の地で、涙が出るほど、嬉しい言葉であった。そうそう、欧州では、「ホテルで困ったことがあったら *Concierge* コンセルジュ、図書館で困ったら *librarian* (司書) に尋ねよ」と殆どの人が言う。それ程、*librarian* (司書) は博学なのだ。今ではどの大学にも検索性パソコンが設置してあるものの、本の内容まではあまり分からない。本当に、どこの大学に行っても *librarian* に助けてもらったことが数え切れぬ程ある。

さて授業は講義というよりは、むしろ教授や他の国(殆どが欧州)から来た先生方とのディベート中心であった。それが終わると真っ先に図書館へ走って行き、その授業法に関する文献を探す。そして自分なりに提出用の論文の下書きを黙々とする。図書館特有の、良い匂いに包まれながら研究する。英国の冬は日が暮れるのが早く、家路に着く頃は、あたりは真っ暗。でも温かく玄関で出迎えてくれるホストファミリー。メールの時代になった今でも、交流を続けている。

「英国料理は美味しくない」とか言う人がいるが、それはイギリスの家庭料理を知らない人である。詳細は林望先生の書を読んで戴きたい。やはりゆっくりと思考し、ゆっくりと人生を楽しむ英国は素晴らしい。大学の図書館のみならず、街並みにぴったりフィットしている街の公共図書館にも足を運んでいただきたい。きっと素晴らしい発見が出来ると思う。インターネットも便利で良いが、ページをめくる時の書物の匂いも肌で感じて戴きたいものである。

今は多くのことを教えて戴いた欧州の図書館に、感謝する日々である。





意外な結末とメッセージ……………	機械工学科	第1学年	川野 智博
『雪国』を読んで……………	電気情報工学科	第1学年	大塚 智弘
生きるとは—『城の崎にて』を読んで— ……	物質工学科	第1学年	坂之下 琴実
『海と毒薬』を読んで……………	物質工学科	第1学年	亀元 順平
みすばらしくて美しいものと檸檬……………	建築学科	第1学年	青屋 瑞稀
『高瀬舟』を読んで……………	機械工学科	第2学年	前田 康貴
『ノルウェイの森』で考えさせられたこと……………	電気情報工学科	第2学年	吉松 佳威
『人間失格』を読んで……………	物質工学科	第2学年	磯脇 恋
世界の果て—『壁』(安部公房)を読んで— ……	物質工学科	第2学年	川崎 夏鈴
『風立ちぬ』を読んで……………	建築学科	第2学年	草野 諒太
『夜間飛行』から感じたこと……………	機械工学科	第3学年	川野 大成
『生きることの意味』を読んで……………	電気情報工学科	第3学年	湯浅 陵
それぞれに見える世界……………	物質工学科	第3学年	米澤 茉唯
『泥の河』を読んで……………	建築学科	第3学年	中野 遥香

## 校内読書感想文コンクール入賞作品

### 意外な結末とメッセージ

『金閣寺』。この題名から、私は歴史についての話を想像していました。しかし、実際の内容は、それとは全く違っていました。

吃り、つまり、話すことが苦手な主人公は、寺の住職である父から金閣寺の美しさを教わります。第二次世界大戦から戦後にかけて主人公の心は揺れ動き、最後には金閣寺に放火してしまいます。

主人公の金閣に対する憧れは大変大きなものでした。「金閣の美しさは絶える時がなかった」とあるように、放火する直前まで美しさを意識しています。それなのに、なぜ放火したのでしょうか。

私は、主人公の美の意識に驚かされました。戦時中という厳しい状況の中、父の死後、遺言により金閣の徒弟になった主人公は、幾度となく金閣を眺めます。自分には、これほどにまで一つのことに執着した経験

1年 機械工学科 川野 智博

がありません。何かに専念したとしても、それは一時的なものであったし、行動に徹することも余りありませんでした。「継続は力なり」という言葉があるように、叶えたいこと、好きなことを貫き通す力の大切さをひしひしと感じました。

しかし、この主人公は、自分が話すのが苦手であることを意識し過ぎているようにも思いました。主人公に二人の友達ができますが、相手の寛容な心と、主人公の伝えたいという心があることで、関係がうまくいっていました。このように、自分の苦手な部分を気にしすぎず、自分を伸ばしていきたい、という思いを大切にしたいと思います。

主人公はそれを避けられず、友人との金銭トラブル、金閣寺の老師と対立するなど、不安定で孤独な生活が続きます。そこで、主人公は日常生活の全てから一度

逃れたいという思いから旅に出るのですが、もし自分であつたら、じっと考えこんでしまい、いっこうに解決しないと思いました。何か大きな壁にぶつかった時に、行動して解決しようという考え方はとても重要だと思います。主人公と自分に足りないものは、逃げずに立ち向かおうとする心ではないかと思いました。

主人公は、次第に「金閣が自分を支配している」と感じるようになり、旅の途中で金閣を放火する決心をつけてしまいます。友人と二人で語る機会ができたとき、「世界を変化させるのは行為」と言っているように、自信を持って「正しい」と思っていることが読みとれます。自分の好きなものから支配を受けた経験が私にもあります。私は比較的、勉強が好きであるため、授業も集中して受けようとします。確かに、その時間を友達との話をする時間に充てても楽しめます。しかし、私にとっては、授業の中での先生方のふとした意見やアイデアを聞き逃がさないことの方が大切です。決して話をしたくない訳ではないのですが、そこで行き違いを感じます。

主人公の金閣寺に対する想いは、私のものより格段に高く、そして自らの人生を拘束していました。主人公の「美」の意識は、父や一人の友人、かつて幼少期を共に過ごした近くの娘の死を受け、「鳴り響いた小さな金鈴の音が途絶える」こと、つまり「ここには存在しない美の予兆」へと移り変わっていきました。こ

の独特な主人公の考え方に、私は驚きを覚えました。たとえ人生が金閣の美に支配されても、最後まで「美」を貫き通す主人公に感銘を受けました。

しかしながら、やはり主人公も自分の「行為」について葛藤していました。対立した老師とも、「私」とはどういう人間なのか尋ねる場面もありました。そして、主人公は金閣を放火したのち、そこを死に場所にするので、その葛藤そのものと命とを同時に終わらせることをひらめきます。しかし、自らが死ぬことは叶わず、「生きよう」と決意して話は終わります。

逃げるため、美のために思い立った。「放火」という「行為」が主人公に与えたものは、大きなものであったと思います。この後の主人公については何も書かれていません。しかし、放火犯として処罰されても、主人公が意志を持って生き抜いていることを信じる他ありません。この主人公の行動から、無数のことを感じ、得ることができました。

これから先、仕事など、好きなことが自分を拘束した時にどう動くか。これはとても難しい問いですが、主人公のように「行為」で解決するか、「認識」、つまり理解することで解決するのか、どちらかなのではないかと思います。どちらにせよ、解決したいことに対する想いによって道が開けるのは間違いないのだ、というメッセージが、この『金閣寺』には詰まっています。

## 『雪国』を読んで

パタンと本を閉じて、この物語を始めから回想してみた。するとどうだろう。これまで自分が本の中に入り、実際に見てきたかのように美しい景色がよみがえってきた。永遠と思えるほど連なる山々、その前をガタガタと揺れ動く汽車。そして、それらを生き生きと色付ける鮮やかな色。私はこれまでにたくさんの本を読んできたが、この『雪国』ほど繊細な美しさがよみがえってきたことはなかった。細やかなところまで丁寧に描く書き方は作者の特徴であろう。

「国境のトンネルを抜けると雪国であった。」このフレーズは数ある文学作品の中でも特に有名だろう。私はこの文の続きが気になり、『雪国』を読んでみたいと思った。トンネルを抜けると雪国であり、その後にはどのような人物がいるのか。どのような事件が起こるのだろうか。そして、それらがどのように絡み合っ

## 1年 電気情報工学科 大塚 智 弘

くるのだろうか。そんな心持ちで読み始めると、さっそく、二行目で心を奪われてしまった。「夜の底が白くなった。」という文だ。一行目で真っ白を思わせておいて、いきなり夜という真っ黒——闇だ。さらに「夜の底が白くなる。」という自然描写の豊かさに惹きつけられた。私は夜の闇、雪の白、そして月明かりの黄色が一気に頭の中を駆け巡った。この時から主人公である島村と一緒に私も旅をしていたのかもしれない。

この冒頭から繰り広げられる物語には、二つの世界があるのではないかと考える。一つはほとんど書かれていないが、島村が東京へ帰った時の世界。もう一つは雪国での世界だ。この二つの世界は、近いようで遠い存在になっている。いわば、現実世界と夢うつつの世界を繋ぎ止める唯一のモノ、それは鏡ではないだろうか。島村は、事あるごとに鏡を見て様々な感情を抱



いている。そして、それは鏡の奥で見たものの美しさが大半を占めている。汽車の中で野山のともし火と葉子の顔が重なって見えた時には、「なんとも言えない美しさを感じ、胸を震わせた。」と思った。鏡台を向き、「帰りますわ。」という真っ赤な頬の駒子と、その奥に映る真っ白な雪を見て、「なんともいえぬ清潔な美しさであった。」と思った。私が考えるに、島村は鏡を見るたびに東京と雪国を比較していたのではないか。そして、雪国の神秘的な美しさ、さらには駒子の純粹さまでも再確認していたのではないだろうか。

この物語の最後は、それまでと打って変わって火事の現場である。ここでもやはり周りの様子が細かく描かれている。闇の中に積もる雪。その中で激しく燃えさかる炎。そして、静かにたたずむ天の川。これらが混ざり合い、最後の場面を飾っていた。ここで事件は起きた。失心した葉子が繭倉の二階から落ちたのだ。駒子はすぐに駆け寄ったのに、島村はなかなか近づけ

ないのだが、そこで私はふと思った。駒子はこれから誰と生きていくのだろうか。別離が迫っているように感じていた島村は、もう駒子とは会えないのだろうか。その答えはどこにもない。しかし、答えがなくても良いのではないかと私は思う。続きは自分で考え、自分なりに完成させることも読者の楽しみだと感じるのだ。

私はこれまで日本の文学作品にはほとんど手付かずであった。お堅いというイメージが強く、近寄りがたかった。しかし、『雪国』と出会い、読み、そして考えることで、文学作品の楽しさを味わうことができた。また、本の中に込められた著者の思いを自分なりに解くことで、強い刺激を受けることができた。これからは積極的に日本文学に触れ、著者による文体の特徴などを自分で発見していきたい。そして、周りの人にも読書の良さを教えられるようになりたい。

## 生きることは—『城の崎にて』を讀んで—

1年 物質工学科 坂之下 琴 実

私は授業でも取り扱っている、『城の崎について』をもう一度深く読みなおしてみた。この物語は、主人公の「私」が自分自身の「死」、そして周りのいきものの「死」、それぞれに直面した様子が描かれている。私はこの作品を通して、生きること・死ぬこと、その二つについて深く考えさせられた。

私は小学校二年生のとき、病気で父を亡くした。肺ガンであった。そのときはまだ、父が亡くなったことに実感が湧かなかった。でも、幼いながらにショックは大きかった。ただただ悲しかった。その日から、「死」はこんなにも身近に存在するのだとを感じるようになった。主人公——「自分」のように。小学校低学年の私でさえ、こんなにも落ちこんでいたのだから、母や兄、姉は相当に辛かっただろうと思う。父が亡くなったあと、半年は暗く辛い生活を送っていたような記憶がある。それほどまでに、父の死は大きなものであった。成長して、父の死を振りかえってみると、とても辛く悲しい出来事だったのだと改めて感じた。

この物語では、主人公の体験のほかに、蜂、ねずみ、いもりの三種類の動物の死が描かれている。それぞれに、静かな死、理不尽な死、不条理な死が描かれている。これはどれも、私たち人間にも起こりうる死だと

私は思う。現代社会では、静かな死——孤独死、理不尽な死——殺人、不条理な死——事故、それぞれに当てはまる死は毎日と言っていいほどよく耳にする。これらの死は、果たして自分に関係ないものだと言ってよいのだろうか。いや、そうではない。どれも本当に、本当にすぐそばにあるのだ。「生と死は両極ではない。」まさにその通りなのである。

作品の中で、主人公の——「自分」自身も事故に遭ってしまう。もし傷が悪化し、脊髄カリエスにでもなると死んでしまうかもしれない。そんな大きな事故であった。しかし——「自分」は「偶然」生き残ったのである。それと「偶然」死んでしまった三匹の動物達とが実に対照的に描かれている。この物語では、生と死が対照的に描かれている場面がよく出てくる。そこでは、死に対する恐怖、死への抵抗がありありと表現されていた。

誰にだって死への恐怖はあるはずだ。私も死というものはとても恐ろしいものであると思う。しかし、現代社会では、死を簡単に口に出す、人に対する死の暴言、罵声が鳴り止まない。私はそれが不思議でたまらない。なぜ人は簡単に死を口に出せるのか。なぜ命を簡単に捨ててしまうのか。私の体験も関係しているの

だろうが、それはとても悲しいことであると思うのだ。

前述したように、「生と死は両極ではない」のだ。だからこそ、今私たちが「生きている」ということは何

ものにも代えがたい、価値のあるものであるのだ。それを決して無駄にしたり、生きることを諦めたりしてはならないのではないだろうか。

## 『海と毒薬』を読んで

読み終えたあと、私の頭に真っ先に浮かんだのは、本のタイトル『海と毒薬』の意味って何だろうという疑問であった。本を手にとった時、その内容のことは帯に書いてある程度のことしか知らなかった私は、生体解剖のときの麻酔のことを毒薬と称していると思っていたのだ。

私は、疑問符でいっぱいの中をクリアにしたいと考えてみた。

海が出てくる場面は、二ヶ所だけ心に残っている。まず、海のさまざまな色を見て勝呂が空想にふける場面だ。時には、苦しいほど碧く光り、時には陰鬱に黒ずんだ海。空襲で町が焼け、焼けた部分は黄色い砂漠のように毎日が広がっていく。夜ごとの空襲で死にいく者、暗い部屋の粗末なベッドでやがては衰弱死してしまいそうな者。そんな戦争のことも病院のことも、海を眺めることで忘れられる気がするのである。毎日の生活の中で勝呂が唯一心の安らぐひとときのようなのである。心の救済という感じなのかと考えた。そして、最後の場面に出てくる海だ。生体解剖のあった日の晩だ。闇の中に白く光る海を見つけた。そして、勝呂は何かをそこから探そうとした。でも、できなかった。何だったのだろうか。心の救済を求めているのだろうか。解剖の手伝いを打診されたときに断らなかった自分の心の弱さを悔いていたのだろうか。同僚の戸田と違って、勝呂ははなから出世など頭がないように思えた。強制されているわけでもなかった。それなのになぜ。当日オペが始まる直前まで退避する機会があったのに。受諾するか否か迷っていたのではないかと思う。ただ断る勇気を持てなかったのだろうか。運命に抗うほどの強い気持ちを持ていなかったのだろうか。

そのとき、私ははっとした。運命こそが毒薬なのではないか。毒薬を撥ねつける強さを持ち合せていない者が運命に翻弄されるのだ。心の内を表に出さない、出せない。まるで今の私だ。でも、私は今のところそのことを気に病んだり、思いつめたりすることはない。ただ、このまま大人になっていくことに不安がないこ

### 1年 物質工学科 亀元 順平

ともない。運命に逆らってもどうしようもないこと、諦めるしかしょうがないことなど、これからの人生にはたくさんあると思う。しかし、私は自分の人生を終えるときにできるだけ後悔したくないので、転機の際の決断は、機を逃さずに大胆にしたいと思う。それが結果的に思わしくない方向に向いたとしても、心の内を閉じ込めたままにしておくよりはいいと思っているからだ。

勝呂にとっての海のような、心の救いを求めるものに私はまだ出会っていない。戸田もそうだったのだろうか。

ただ、戸田の場合はちょっと違う気がする。私には心を病んでいるとしか思えない。少年時代の苦い思い出は誰にでもある。私もその一人だ。そして、そのときの心の痛みも同時に思い出される。良心の呵責に苦しんだり悩んだりした。戸田には、それがまったくなかったのだ。怖いと思った。

この本はノンフィクションではない。解剖の事実があったが、出てくる人々は想像で描かれている。筆者は解剖の是非を問うているのではなく、この本を通して人の心の深淵を探っているのではないのだろうか。「毒薬」という好ましかからざる運命に人はどう立ち向かっていくのか。海という心の救いに休息しながら、人はどう生きていくのか。この本に出てくる勝呂以外の医者や軍人を見ていると、世の中が悪意に満ちているようで気が重くなる。しかし、キリスト教信者である筆者は、絶望を訴えるのではなく、ただ問いかけているように思える。

私は良心という内なる罰を失ってはならないと思った。犯した罪の軽重に関わらず、その罪が露見して社会的罰を受ける受けないに関わらず、良心で自己を律しなければならぬと思った。





# 見すばらしくて美しいものと檸檬

1年 建築学科 青屋瑞稀

人の通りが少ないかもしれないような場所にこそ、自分を興奮させ、つかの間の快い気持ちを味わうことができるのが、この裏通りなんじゃないかと、この作品を読んで強く感じた。

風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこかで親しみのある、汚い洗濯物が干してあったり、がらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。——確かに自分も裏通りの方が好きなのかもしれない、と話に引き込まれる、まるで好奇心にあふれた少年の瞳の輝きのような憧れがここにあった。この物語には、物語に読者を引き込ませる技法が上手く使われているように感じる。

まず一つ目に、「赤」「紫」「黄」「青」など色を書くことにより、「花火」への色づかいと物語への着色という効果が出ている。もしこの部分に色が書かれていなくて「花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵の具の色や、さまざまな縞模様を持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき」とでもなっていたならば、どこか物語自体も味気なくなるような気がする。同じように「向日葵」「カンナ」「京都」「仙台」「長崎」「南京玉」「丸善」なども味付けの効果があると思われる。

二つ目に、「がらくた」「びいどろ」と平仮名表記になっているという点だ。通常私達は「ガラクタ」「ビードロ」という書き方をする。しかし平仮名で書くことで、その当時の趣や壊れかかった裏通りを連想させる。

三つ目は、「私」の好きな果物屋が表と裏の境界にあ

るといこと。境界にありながら夜は特に裏通りの暗い静かないい感じを出している。だからどうだということではないが、その場の雰囲気をもっと直観的に伝えているように感じる。

四つ目に、題名にもなっている「檸檬」の登場。「その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかった」。普段自分たちが触れるれもんは、冷たいわけでもなく温かいわけでもない、ぬるい状態にある。しかし、「私が肺尖を悪くしていても身に熱が出ていたから、檸檬の冷たさが快く感じられた——友達の誰彼の手の冷たさとは違う心地良さがあるのだろう。

また、温かい色の「れもん」がその温かさの反面、冷たさも持っている、というところが、果物屋の表と裏の表現に強く結びついているようにも思える。

人でにぎわい、多くの店がある大通りに憧れる人、小さな裏通りの小さなものに憧れる人、それぞれあるのだろう。

「檸檬」

たった一つの言葉であり、たった一つのもの。その「檸檬」にここまで感情をゆだねることができる主人公は、どことなく今をさまよう現代の人々を写しているような気もした。

小さなことに何かを感じられる人に自分もなれたら、きっともっと、私の世界は広がるのだろう。

そして、次の何かを見つけ、新しい感情が生まれ、私を強くするのだろう。

いつか自分も、一人でふらっと旅に出てみたいものだ。

## 『高瀬舟』を読んで

2年 機械工学科 前田康貴

私は、今回『高瀬舟』を読んで考えたことが二つある。

一つは安楽死についてである。病の弟は、喜助に迷惑をかけぬよう自殺することを決め、自分で剃刀を刺すが、失敗する。そこで喜助に殺してくれと願い、喜助は剃刀を抜いた。重要なのは、この弟が殺してくれと言っているところである。

もちろん、人を殺せば殺人である。人を殺してはいけない理由はともかく、日本では死刑もありえる非常

に重い罪である。

喜助は、まだ息のあった弟の喉の剃刀を抜き、殺した。つまり殺人である。実際に喜助は、遠島の刑を受けている。しかし喜助は、弟に剃刀を抜いて殺すように要求されている。もし喜助が剃刀を抜かなくても、弟はいずれ死んでいただであらう。しかし、死ぬまで苦しむことになる。それは、弟の望んでいることなのだろうか。苦しませるくらいなら弟の願い通り楽にして

やった方がいいのではないか、喜助はそう考えて剃刀を抜く決断をしたのだろう。これは、殺人にあたるのだろうか。

このことについて私は、喜助の考えに近い意見を持った。人には、自己決定権がある。自分の生活や命について、自分で決める権利がある。弟は自分の命について、死ぬという決断をし、剃刀を喉に刺した。自殺は失敗に終わるが、兄の助けもあり、弟自身が決めた通りになった。もちろん、殺人という罪は殺された本人の痛みだけを考えた罪ではない。殺された人の周りの人の悲しみや痛みを含めたものが殺人罪である。しかしこれは一般的な殺人ではない。弟が痛み、殺してほしいと願っている。このような場合は、周りの人間の感情よりも本人の願いを最優先にすべきだと考えた。もちろん、安楽死をすすめているわけではない。遺族の悲しみや痛みは計り知れない。しかし、最優先すべきは本人の意思だと私は考えた。何に關しても言えることだが、安楽死については特に、正しい答えは無いのだとも思う。

もう一つは、人間の欲についてである。喜助は、罪人として捕まる前は極めて貧しい生活を送っていた。そのため皮肉にも、罪人として捕まってからの方が良い生活を送っていたのである。毎日食事が出て、身の安全も確保され、更に島に流される前に二百文を渡される。二百文は決して高い金額ではないが、喜助にとっては十分すぎる程で、「満足」していたのである。こ

で、護送役である庄兵衛は喜助と自分を比較する。一度は、喜助と自分はそろばんの桁が違うだけだという答えにたどり着く。しかし、自分がもし喜助の立場でも同じ心持ちができるとは思えない。人間の欲は尽きないものであるが、喜助は欲を踏みとどめることができていることに気づく。

このことについて私は、喜助に対して違和感を持った。人間には欲はあって当然である。しかし、あるからといって「悪」な訳ではないと思う。もしこの世が喜助のように欲が無く現状に満足する人間しかいなければ、そこから進歩することはない。もっと便利に、もっと楽に、という欲があるからこそ技術は進歩する。そのため、私は欲はあっていいものだと思う。それは人間を進歩させてくれるものである。

「高瀬舟」は以前に一度読んだことがあったが、その時は特に印象に残らなかった。しかし、今回は読んだ後心に残るものがあり、深く考えさせられた。このように、読んだことのある本も読み返すと意外な所に気づくことができると分かった。さらに今回は「安楽死の是非」や「人間の欲」など、日常生活を送っている中では考えることのないようなことがとても考えやすく問題提起され、自分も自然とそこに入り込んで考えることができた。また考える中で、今回扱う「安楽死」や「人間の欲」には正しい答えが無く、人それぞれの考えがあり、それは価値観によって大きく異なるのだと思った。

## 『ノルウェイの森』で考えさせられたこと

2年 電気情報工学科 吉松佳威

この本の最初の印象は、切ないというものが少し恐いというものだった。しかし、読み進めている内にあまりよく分からないという思いの方が強まった。また、性的描写が無駄に多すぎると思った。性的描写が効果的だと思う場面もいくつかあったけれど、あまり意味がなさそうなどころにもその描写があり、少ししつこいと思った。

僕はこの本を読み始めたばかりの時に、一つ目の疑問を持った。それは、主人公ワタナベや直子と大変仲が良かったキズキがいきなり自殺してしまった事だ。原因となりそうな出来事が何も書かれていなかったで、この答えは、読み進めていけば分かったと思った。しかし、最後までキズキの自殺の原因は全く書かれていなかった。だから、今でもとてもモヤモヤしている。

物語を読み進めていくと、ワタナベの住む学生寮の先輩である永沢が出てきたのである。僕はこの永沢という人物の言動はあまり好きではない。この作品の昭和43年頃という時代背景に合せてあると思われる男尊女卑の考え方がその原因だ。恋人がいるのに、よく他の女性と一緒に寝ているというところは、すごく軽薄な人なのだと思う。しかし、そんな永沢の言葉の中で一つだけ共感出来るものがあった。「自分に同情するのは下劣な人間のやることだ」という言葉である。僕はこの部分を読んだとき、自分について考えてみた。僕は自分に同情したことがある気がする。今考えてみれば、自分はとても卑怯な一面もあると思う。だから、今後は自分に同情するような卑怯な人間にだけはならないようにしようと思う。



それから、また物語を読み進めていくと、二つ目の疑問が生まれた。それは、物語の終盤で直子が自殺してしまう場面である。なぜこのタイミングで自殺したのか。これも最後まで読み終えてみても分からなかった。恋人のキズキが自殺してショックだったのであれば、すぐにでも後を追うだろうと思った。しかし、もう一度最初から読み返してみた時に分かった気がした。僕は直子が自殺した理由は、ワタナベからレイコにあてた手紙に関係していると思う。直子はワタナベが自分のことを好きだと知っている。だからキズキのことが好きだった自分が自殺してしまえば、自分のことを好いてくれているワタナベも自殺してしまうのではないかと心配していた。そんな時、ワタナベが緑のことが好き、という内容の手紙をレイコに書き、それを見た直子は安心して自殺してしまったのだと思う。現に、その後ワタナベは直子の死を悲しんだが、緑を生きる糧として最後まで生きた。だから僕は、ワタナ

ベの手紙で直子は安心して死んだのだと思う。

そして、最後の部分でとても気になった言葉がある。緑の「あなた、今どこにいるの」という言葉だ。僕はこれはとても意味深長な言葉だと思う。僕が思うに、これはワタナベの現在地についてではなく、ワタナベの心についてだと思う。ワタナベは、質問されてから少しの間を置いて「分からない」と言った。そこがどこだか分からなければ、すぐに分からないと思う。だから僕は「あなた、今どこにいるの」というのは、ワタナベの心がどこにあるのか、と聞いているのだと思った。

物語はここで終わってしまう。僕はこの物語を読んで、とても奥が深いと思った。また、とても難しい物語であるとも思った。でも、この本を読んでいる間は、周りの声が聞こえなくなるくらい集中するという時間を過ごしたのは今までにないことだった。

## 『人間失格』を読んで

心が重くなる本でした。読み始めてから読み終えて本を閉じるまで、心がずんずんと沈んでいくようでした。

主人公の葉蔵の幼少期は、私には想像もつかないような子供でした。きっと葉蔵は、全く子供らしくない子供だったのだと思います。本来子供なら、したいことをして、我慢なんてほとんどせずに毎日元気に遊んでいればいいと思います。大人では許されないことでも幼い子供であるからこそ許されるということがたくさんあると思うのです。しかし彼は、大人に対して異常なほどの恐怖を抱いていました。それは大人にだけではありませんでした。兄弟や友達、つまり、人間が怖かったのです。そしていつしか、そんな恐怖を隠すために「道化」を身につけます。幼い子供ながらに周りの目を気にして、お道化することで自分の本当の気持ちを出さずに過ごしました。

私は葉蔵は子供らしくない子供だったのではないかとはいいましたが、正しくは、客観的に見ると子供らしい純粋な子に映っていたでしょう。しかし実際は、本当の気持ちなんて一切表に出さない恐ろしい子供だったのです。私の幼いころと比べると共感するところなんて一つもありませんが、十七歳になった今の私と葉蔵には似ている部分があると思いました。

## 2年 物質工学科 磯脇 恋

それは、人の目を気にして本音を隠してしまうということです。他人から見た自分はどのように映っているのか、そしてどんな風に思われているのか…。時に考えすぎて頭がパンクしてしまいそうになります。自分はこうしたいのだけど、相手はどう感じるだろうか。何をするにしてもそう考えてしまいます。

人間なら誰しも、表と裏の顔というのがあると思います。人には見せることのできない心の奥に秘めている「もう一人の自分」のようなものがあるものです。自分を全てさらけ出してしまうのはとても勇気がいることだと思います。しかし反対に、本当の自分を全く表に出さずに生きるとすればどうでしょうか。私はとてもかわいそうな生き方だと思います。きっと、ストレスなどという言葉では片付けられないでしょう。不幸とはこういうことだと身をもって感じるはずです。

もし葉蔵に、本音が言えて自分をさらけ出せるような存在が一人でもいれば、彼の人生は大きく変わっていたと思います。相談相手の存在というのはとても大切なのだと感じました。

葉蔵が歳をとっていくなかで、恐怖心など人に対する思いが少しずつ変わっていったのを感じました。様々な経験をするうちに少しだけ自分を出せるようになった場面もありました。しかし、やはり根本は変わ

ることはなかったの、大きな変化はありませんでした。彼にとって人生とは何だったのでしょうか。人生とは何かなんて、そんな大きなことを考えても、私にもはっきりとした答えは思い浮かびません。しかし、決して幸せな人生ではなかったでしょう。

この本を読んで、心が沈むような感覚になったのは、ハッピーエンドではなかったからだと思います。そして、葉蔵と自分に似ているところを見つけたことで、心に何かひっかかった様な気がしたのだと思いました。

『人間失格』私はこのタイトルに今でも疑問を感じて

います。なぜなら、葉蔵は決して「人間失格」ではないと思うからです。確かに彼は、人間らしさには欠けています。狂人と言われても仕方ないかもしれません。しかし、人の目を気にしすぎるという彼の本質は人間だからこそその悩みであり、それこそ人間らしいのです。だから私は、葉蔵は「人間失格」ではないと思います。

はっきり言って私は葉蔵のようにはなりたくありません。本を読んで、良い心地はしませんでした。自分を振り返ることができて良かったと思いました。これからも、意思を伝えることを大切にしながら生きていきたいと思っています。

## 世界の果て一 『壁』 (安部公房) を読んで一

2年 物質工学科 川崎夏鈴

この本は、ある男が突然名前を喪失してしまう。それ以来その男は、慣習が多くを占める現実で存在権を失う。そこで男は、不条理な世界で「壁」から逃れながら愛する人を守るため、自分を守るために世界の果てを探す話である。

なぜ男は世界の果てを探すのだろうか。それは、不条理な世界に男が存在する限り背理が男を追いつめるからだと思う。私も男のようにこの場所から逃げたい、どこか遠い所に行きたいと考えた事もあった。人間の暮らしは、常に多くの事に縛られている。だから人間は、縛られている事から逃れたいと、自分を誰も知らない空間を求めるのだ。だが私は、自分の生きる世界と向き合うべきだと考える。自分に起こる必然や偶然を受け止め、乗り越える必要があると思う。

また、「壁」とは何だろうか。私が思い浮かべる「壁」は、物的なもの、目に見えないもの等多く存在する。人間はその「壁」から逃れようと、乗り越えようと必死なのである。だが、「壁」が存在しなかったらどうだろうか。人間は、何からも守ってもらえないのだ。生きる上で何かを考え、悩むことも無いのだ。人間は、毎日変化の無い生活を営むのだ。「壁」の存在しない世界の方が、私たち人間は逃げだしたくなると思う。私は、「壁」にぶち当たり乗り越えた上で、人間は成長し喜びを感じられるのだ考える。つまり「壁」とは、人間を外の世界から守ってくれる盾であり、自分の心の中にある存在なのである。

「善をなさんと欲して悪をなす」この本に書かれている言葉である。私はこの言葉の上で世界は成り立っていると考える。例えば、いじめである。いじめたほう

が悪い、いじめられたほうに問題があると、二つの意見が存在する。どちらにも言い分があり、それぞれの正しさがある。しかし、正しさを求め攻撃を行う自分がその行為で誰かをいじめているということに気がついていない。いじめという行為は悪いといいながら、自らがいじめを行っている実態に気がついていないのだ。この状態が「善をなさんと欲して悪をなす」である。私は、このような状態を改善するためには誰が悪いかを問うのではなく、問題が起きる元を解決することが必要だと考える。

この本には、男が愛したY子という女が登場する。Y子は、不条理な世界から男を救おうと奮闘するのだった。しかし、Y子もマネキン人形によって存在権を喪失してしまう。Y子は最後まで男を愛し、信じていたのだ。また、マネキン人形もマネキンから愛されていた。だが、人間への嫉妬心に負け、愛するものが見えなくなってしまったのだ。本には、Y子の悲しみとマネキン人形の喜びが歌によって表現されている。人間でなくても心を持っているのだ。私たちが毎日使用しているもの全てに心があり、愛することができるのだ。だから私たち人間は、それらを大切にしなければならぬ。人間は道具がなければ、何ひとつ思うようにできないのだ。ひとつひとつのものに感謝をし、大切にしていかなければならないと思う。

世界の果てとは何だろうか。私は、北極と南極のように遠い存在のように思えて、一番身近な所のことだと思う。私たちはこれからも「壁」の中で世界の果てを探し続けるのだろう。しかし私は、「壁」に守られ乗り越えて行ける人になりたい。ひとつひとつのことを

大切にし、愛し愛される人になりたい。そして、自分

の世界の果てを大切にできる人になりたい。

## 『風立ちぬ』を読んで

もしも、あなたの愛する人が、大切な人が、一番身近にいる人が、重い病にかかっている長くは生きられないと知っていたら、どうしたいですか。私は、その人と少しでも長い時間を共に過ごしたい、ずっと側にいたいと思うでしょう。そして、その人にとっての喜びを一つでも多く叶えてあげ、生きる喜びを共に感じられるように努力すると思います。

この本の主人公である「私」の婚約者節子は結核という重い病(当時は)にかかっています。美しい自然に囲まれた高原の風景の中で、やがてくる愛する人の死を覚悟しながらも、二人の限られた日々を、美しい自然の様子を背景に、「生」を強く意識して共に生きていきます。この本では、「生」と「死」の意味を問いかける場面が多いなと思いました。

私自身、「生」と「死」で深く考えさせられた出来事と言えば、祖父の死です。小学六年生だった当時を振り返ると、祖父は自分の中では一番大切な存在でした。そんな祖父のガンが悪化した時はショックでした。入退院を繰り返す日々。病状が少しずつ回復期に近付いている様に見えることも多々ありました。それでも、その回復へはもどかしいような一歩一歩でした。「私」も最愛の婚約者が少しでも早く回復し、退院することができたら、一刻も早く結婚したいと思っていたに違いないと思います。病室で、二人きりの場面も多かったのですが、もしかするとそんな話をしていたのかもしれませんが。二人の愛情の細やかさが生き生きと描き出されていますが、その二人の心理描写は、自然の美しさと調和して語られているように思います。この物語では、婚約者の「生きたい」という想いがすごく伝わってきました。結核と闘うことは、大変で辛いことだけ

## 2年 建築学科 草野 諒 太

れど、これを乗り越えれば、二人で喜びを味わうことができるかもしれないという想いがあったと思います。それは、時々交わす平凡な会話や、一つの動作、気持ちなどからも感じられます。

しかし、病状は次第に深刻な程に悪化していきます。それまで、病室につきっきりでいた「私」も隣の空き部屋に移されることになったのです。一日に数回しか会えなくなったため、「私」は部屋で日記を書いたり、一人で森へ出かけたりの日々が続きました。恋人と離れてからの時間が異様に感じられることが、森の木の葉が落ち、森の静けさが一層増す季節の推移と共に変化しているように思いました。

——最終章——死のかけ谷の場面で私が気になった言葉があります。

「私が今こんなふう生きていられるのも、お前の無償の愛に支えられているのだと私は気づいた。」

この言葉は、おそらく天国の恋人へ宛てて書いたものでしょう。この世にいらなくても天から自分のことを見守ってくれているので、「私」は安心して暮らせているのだと気づいたんだと思います。私自身も祖父からこのように支えられて生きているのかなと思うと、少し嬉しくなります。

私たちは、普段、スポーツのこと、勉強のこと、趣味のことなど生きることばかり考えています。しかし、私たちはいつか確実に死ぬ時がやってきます。例えば、それが結核、ガン患者でなくても。考えたくないけれど、必ずやってくる死を見つめることも大事だと思います。いつ死んでも自分の人生に悔いなし、と言えるように生きたいと思います。

「風立ちぬ いざ生きめやも」

## 『夜間飛行』から感じたこと

あなたにとって、「リーダー」とはどのようなことを表す言葉だろうか。

部下のことを気遣い、同じ目線に立って仕事できる者をさす言葉だろうか。あるいは、自らを絶対として

## 3年 機械工学科 川野 大成

疑わぬ、いわば独裁者のような者をさす言葉だろうか。

この物語におけるリーダー、「リヴィエール」は、相反するようなその二つの要素を、一身に宿したキャラクターと言えるかもしれない。



物語の題名は「夜間飛行」。フランスの作家サン＝テグジュペリが、自らの経験をベースに著した短編小説だ。

舞台は二十世紀初期、まだプロペラ飛行機が空の主人公であった時代。リヴィエールは夜間の航空輸送の開拓者として登場する。航空輸送の市場が形成されはじめ、各国間の競争が激化しはじめた頃、彼は夜間の輸送に活路を見出したのだった。

しかし昼間の航空すらも危険とされていた時代。そんな時代にあって、彼は部下に対し、冷酷ともとれる規律を与えた。例え濃霧であっても遅刻者は処分し、例え二十年間彼の下で働いてきた者であっても、事故を起こせば即刻解雇する。現代であれば非人道的だ、として非難されるに違いない行動だ。彼は規律を厳格にする理由として、常に部下たちの気を引き締め、パイロットも整備士も通信士も、みな一緒となって危険なフライトに臨ませるためだ、として、また処罰するのも人間に対してではなく、人間の中に存在する事故を起こす「可能性」に対してなのだ、とする。だがやはり、彼は感情をもたぬ冷血漢なのではないかとも思える。

彼は人の感情を捨て、「正しさ」で人を支配する独裁者なのか。

その答えは確実に、「ノー」であるといえるだろう。

自分で行動することなく、「待つ」ことしかできない

彼の苦悩は、物語の様々なところで見受けられる。その中でも、特筆すべきはこのシーンではないだろうか。

ある晩、夜間飛行をしていたファビアンというパイロットの機体が、範囲千キロという巨大な暴風雨に巻きこまれる。悪天候のため通信もままならず、何もできぬ状況。その中で彼は自問する。

「自分は、何者の名において彼等を平凡な日常から引きずり出しているのか？」

「自分は何者の名において行動しているのか？」

普段から「正しさ」と「人の情」の板ばさみになっていたリヴィエールの心が、部下の命が危うい状況において、言葉を伴った瞬間だったのだろう。

作者であるサン＝テグジュペリは、軍に所属した時期もある生粋の飛行機乗りだ。そんな彼がしたためたこの物語には、リヴィエールの人柄だけでなく、航空黎明期の飛行の厳しさと美しさまで精密に描かれている。操縦席の窓から見える民家の明かり、赤いランプに照らされる計器の数々。そうした中で、「同情を表に出さない」リヴィエールこそ、サン＝テグジュペリの描きたかった「リーダー」なのではないだろうか。

正しいリーダーのあり方を、言葉で表すのではとても難しいことだろう。リヴィエールはある意味、それを体現しながらも、漠然と正しいリーダーのあり方の一角を見せる、そんなキャラクターなのだと思う。

## 『生きることの意味』を読んで

今年の読書感想分は課題図書の中から高史明さんの「生きることの意味」という本を選びました。この本の題名を見てとても興味をひかれたからです。この「生きることの意味」については誰もが一度は考えたことがあると思います。私も何回も考えたことがあります。これは哲学的な要素もあり、難しい問いだと思います。また、人それぞれ答えは違うと思います。高史明さんはどんな考えなのかとても興味をひかれ、この本を読もうと思いました。

実際に本を手にとってみると、この本には「生きることの意味—ある少年のおいたち」という風に副題がついていました。この副題にある少年とは著者のことであり、この本は第二次世界大戦前から戦後にかけての在日朝鮮人である著者の少年時代の生い立ちを書いたものでした。少年時代の家庭や学校でのつらい出来

3年 電気情報工学科 湯 浅 陵

事などの経験が示され、かなり悲惨な事が次から次へと書かれていて、非常に心が痛みました。これが著者の経験談であり、フィクションではないということがさらに私の心を痛みつけました。今もなお、在日朝鮮人に対する差別は無いとは言えませんが、昔はかなりひどく差別されていたんだなと思いました。それに加え、幼いころに母を亡くしたりと著者の少年時代は本当に悲惨だったんだなと文章を読むだけで当時の辛さを感じました。

しかし、この本は著者の少年時代の辛い思い出をただ書いているわけではありません。この本を読んでいくうちに私は、この本に書かれていることは人のやさしさだと思いました。

人間、誰でも家族がいて、友人がいて、人生において人のやさしさにたくさん触れていると思います。著

者もいろんな辛い思いもしてきたが人のやさしさにちゃんと触れていました。その人とは学校の先生です。先生方も著者に対し差別をしていた中でその先生だけはちゃんと子供の事を思う人だったらいいです。その先生と出会ったときに、著者はきっと初めて心底自分のことを思ってくれる人間を見つけたと思ったに違いありません。その先生との出会った後のふれあいの場面はなんともいえない気持ちになりました。まさに人のやさしさだなと思いました。しかし、この先生は急逝してしまいます。その時著者はきっとひどく落ちこんだはずです。自分の事を心底思ってくれる人間が亡くなってしまった時の悲しみ、想像するだけでかなり辛い思いになります。しかし、この本で著者は人のやさしさこそは、人間を生かしていく本当の力になる。

## それぞれに見える世界

私がまだ小学生だったころ、ある作者の物語の紹介文を書くという機会があった。紹介文を書くとなると、やはり自分自身はその話をしっかりと解釈する必要がある。しかし、当時の私にとってはその作者の話は、非常に難しく感じた。今になっても変わらずその作者「宮澤賢治」の描く物語は少し不思議である。『注文の多い料理店』—私は、彼に挑戦する気持ちでこの文庫本を選んだ。

この本の中にある「鳥の北斗七星」という話の主人公は、人ではなく鳥、さらに鳥である。

その鳥達の中では、私達人間と同じように地位や階級、役割までがある。そんな鳥達が弱肉強食であるこの世界をどんな思いで生きているのかが描かれている。

私は、高専三年生の今になっても考えることがある。それは、動物達は、私たちと同じように会話をしているのか、ということである。この物語に登場する鳥達は敬語まで使いこなしていて、現に私の家の犬や電線にとまっているすずめ達は、仲間の声が聞こえたり、姿を見つけたりすると、吠えたり鳴いたりする。私には、同じ鳴き声に聞こえるが、彼らにしてみたら、しっかりあいさつもして、家の犬も敬語なども使ったりしているのかもしれない。それに彼らから見たら私達の言葉も鳴き声として耳に入っていて、人間は変な「鳴き声」だなんて噂されているのかもしれない。私達の鳴き声とはどんな感じなのか気になる。自分の声は、

それは人との出会いによる。この出会いのすべてが人生の糧になる、とっています。この言葉は本当に良い言葉だと思います。実際に自分が体験した事から著者が感じたことは、説得力があり重みがあります。

本の最後にはこんな事が書いています。「～いまなら、生きることを喜びとして、大声で叫ぶことができると思うのです。生きるって、なんて素晴らしいことなんだ！」と。少年時代の辛い経験をしたが、素晴らしい人と出会うことができ、今では生きることは素晴らしいと言える。著者はなんて強い人なんだと思いました。私もこれからの人生で辛いこともあると思いますが人との出会い、人のやさしさを感じながら著者のような強い人間になりたいです。

### 3年 物質工学科 米澤 茉唯

自分の耳でしか聴くことができない。だが、言葉を発する本人の自分では聞けない客観的な声を聞くことは、誰もが持つ特権であり、また、義務であるのではないかと思った。

この物語の最も大きな山場は鳥達が、天敵であり自分達より強い山鳥と戦うところである。仲間達で一丸となって一匹の山鳥を倒す場面である。この物語の中では、自分達の群れのことを艦隊や艦・軍、地位のことを大尉や隊長と例えてある。

私は、一回目に呼んだとき、まるで戦争のような言い回しだなと感じた。そして、何回か読み深めていくと、本当に戦争なのだなと思った。私たちが自分の家で家族と平和に暮らしているときでも、この話の鳥達は私の上空で自分の居場所や家族を守るために日々戦っているということを伝えたいのではないかと思った。守るといっても、住み家や群れを攻めてきた敵から守る以外に、食糧の調達、新しい住み家のために戦いをしかけることも一つの守る形なのではないかと思った。

日本は戦争がなく平和だといわれている。一方、ある国では内戦があり、たくさんの命が危険に脅かされているという。この物語に出てくる鳥達にとっては、毎日生きることは戦い続けることで、常に危険がせまってきたくないか気を張っている必要があるのだと思った。

この戦いの後、鳥達は倒した山鳥を弔う。自分達を

守るためとはいえ、他の命を犠牲にしたことに罪悪感を感じながらも、同じ戦いを経験した同士であるということも考えたのではないかと。

この物語を通して、作者は視点の違いだけで同じ世

界も真逆の世界になるということ、主観であるか客観的であるかでも同じように立場や状況は逆転するということも伝えたかったのではないかと考えた。

## 『泥の河』を読んで

舞台は昭和三十年、戦争の傷跡が残る大阪。その河の畔に住む信雄の話は、ついさっきまで話していた馬引きの男の事故死から始まった。そして、信雄が水上生活をしている貧しい一家に出会い、別れるまでの約一ヶ月がこの「泥の河」で描かれている。

この物語で最初に感じたのは、人の命の儚さである。数分前まで話していた身近な人が自分の目の前でささいな事故により死んでしまう。この出来事は、信雄に大きな衝撃を与えたのではないと思う。また、信雄は父の晋平から、戦争で生き残った晋平の戦友達のあつけない死を語られる。人は死と隣り合わせの戦争から生き残って帰ってきたとしても、それから死と離れられるわけではない。普通に暮らしていても、突然の事故や病気などで簡単に死んでしまう。しかし、だからこそ生きているというのはすごく幸せなことで、どんな辛いことがあっても自分の人生を投げ出さずに精一杯生きていかなければならないのである。

また、晋平の語りの中で「もう戦争はこりごりや」、「そのうちどこかのアホが、退屈しのぎにやり始めよるで」という言葉にすごく重みを感じた。この言葉からすると、晋平にとって戦争は終わってみれば、ただ人の命が失われ、何も得ることができなかつたとしてもくだらないものだったのではないだろうか。今でも世界のどこかで紛争は起きているし、国同士の争いは絶えていない。そして、晋平の言葉のように歴史は繰り返し、争いの時代が訪れるのではないかと考えさせられた。

次に、子どもの純粹さ、純粹だからこそその残酷さである。それを一番に感じたのは、信雄が出会った一家の姉弟で弟の喜一が蟹に油を飲ませ、火を付けた場面である。異様な光景だが、喜一は「きれいやろ」と言って信雄に見せた。信雄はさすがにこれは異常だと感じ、喜一を止めに入った。そのような様子の中から、単純にきれいだからと蟹に次々と火を付けていく喜一への怖さと蟹に対する残酷さを感じた。私も小学生の頃を振り返ってみると、男の子たちがバツを捕まえて足

### 3年 建築学科 中野遥香

をちぎって遊んでいたことを思い出す。これは純粹で無知であったから、ただ単におもしろいと思っていたから出来ていたことなのではないかと思う。

このような喜一の行動を含め、姉の銀子のことや、この姉弟の母のことは信雄の視点から描かれている。不自由なく暮らせている信雄の視点だから、逆に、水上生活という貧しい暮らしをしている一家の切なさ、大変さを感じられる。姉の銀子が信雄の家に遊びに来た時、調理場の米櫃に手を入れて、こうしている時が一番幸せだと言っていた。信雄は、冷たいと返していたが、この銀子の行動から、ちゃんとご飯を食べられることは幸せなのであると改めて思った。銀子のようにそんなつましい幸福を感じる心は、豊かになった日本で失われつつある感情なのかもしれない。戦後十年ほどで戦争の傷跡が残る時代を生きている人ならではの感情だとも思った。

とある夜、信雄は喜一たちの母が男に身を売っているところを見てしまう。信雄は親に夜は喜一たちのところへ行つてはいけなと言われていたが、その光景を見てしまった信雄には残酷な現実を突きつけられる光景だったと思う。母子家庭であった一家が生活をしていくためには、身売りという方法で稼いでいかなかった時代であったのかもしれない。そんな時代だったからこそ、信雄はその一家と関わったことで起こった出来事を忘れずに成長し、大人になっていけなと。そこに切なさを感じた。





去る1月7日（水）、「特活」の時間を利用して、図書館主催の外部講師による講演会が開催された。対象学年は第1学年。この企画は平成21年度から始まり、今回で6回目となる。その眼目は、特定のジャンルに限定せず、様々な分野で活躍している識者の講話を生で聴くことによって、ふだん知的刺激に乏しい学生たちの関心を多方面に向け、視野を拡大させる一助とすることにある。

講師は宮崎大学副学長・理事、兼図書館長の岩本俊孝先生である。演題は「動物行動のシミュレーション——イメージをもつことの大切さ——」である。題目からも明らかなごとく、先生の専門分野は動物生態学、動物行動学、主な研究対象動物はニホンザル、ヒヒ（アフリカ）、シカ、カモシカ、タヌキ、アオウミガメ…等々。

演題の後にスクリーンに最初に大きく映し出されたのは人間の脳であった。すると先生は聴講する学生に向かって、「皆さんの夢はなんですか？」と語りかけた。そして、「その夢を実現できた時のイメージを持っていますか？」「そのために、今なにをしますか？」と続けて尋ねた。先生によれば、人間の脳は右脳と左脳とに分けられるが、前者は知覚・感性をつかさどり、後者は思考・論理をつかさどる。そして、ゴール（夢の実現）のイメージは右脳でなされ、それを具体化するための論理的過程は左脳でなされる。

先生が講演の劈頭を人間の脳から始めたのには、先生が科学者であるという以上の、深い理由があった。ここで話は一転して先生の自己紹介になった。先生は1948年1月1日、福岡県田川郡香春町（現田川市）に生まれ、県立田川高校から、九州大学理学部へと進学した。そして、先生が理学部へと進学したのには大きな理由があった。実は先生は高校2年の頃に、京都大学の河合雅雄氏の『ゴリラ探検記』（昭和36年刊）を読んだことが、その後の生涯を決定したといってもほとんど過言ではない。河合雅雄氏は日本霊長類研究の創始者である今西錦司博士（なお、今西博士の業績、その足跡はとてつもなく巨大で、一言ではいい得ない）の高弟である。ともあれ、先生は河合雅雄氏の『ゴリラ探検記』に多大な感銘及び影響を受けた。そして、その書物を読んで、先生はアフリカの広大なサバンナをジープで疾駆する夢を抱いたという。続けて、「これが私の最初のイメージであった」と先生は言った。私（望月）は勝手に想像するのであるが、先生が『ゴリラ探検記』を読んで強烈なイメージを抱いたのは、動物行動学の開拓者ローレンツの用語で表現すると、インプリンティング（刷り込み）に喩えられないであろうか。

こうして、「アフリカに行く」という若き岩本先生の右脳において直感されたイメージを具体化するための行動が始められた。そのために計画を立てるのは左脳である。そのためには生物学科のある理学部へ進学する必要がある。先生が進学したのは河合雅雄氏のいる京大ではなくて、地元の九大であった。（先生は講演の中で、京大に進学するのが一番よかったのであるが、そんな頭はなかったと謙遜していた。しかし、九大に入学するために必死で受験勉強に励んだといわれた）。先生が進学した九大の生物学科の指導教官は蟹の研究者で、最初は先生に蟹の研究に従事するようを勧めたらしい。容易に首を縦に振らない先生に、その後昆虫、あるいはネズミなど、その他の研究を勧めたというが、岩本青年は飽くまで高校時代に夢見たサルの研究に固執し、諦めることがなかった。先生は多くを語らなかったが、恐らく生物学の勉強と並行して、指導者に恵まれない環境下においてもサル学の研究を一生懸命続け、相応の研究成果を着々と上げていたのであろう。大学のゼミナールのとき、「私の先生が『この方法（九大の松下教授が発明したカモシカの生息密度を、糞塊の密度で推定する方法（糞塊法）、微分方程式を基にした推定法）を理解できているのは、九州でも1人か2人であろう』といった言葉に発奮して、勉学に精進した」と語っている。また、先生は講演の最後のところで、「イメージ通りになるまで、諦めないこと」「しつこく、しつこくやる」ことを力説していたが、この言葉は先生の九大在学中の体験から導き出されたものであろう。

たまたま九大の指導教授が河合雅雄氏と知り合いであったこともあって、8年後には認められて河合氏を隊長とするチームの一員に加えられ、遂に念願のアフリカのエチオピアにおいてゲラダヒヒの研究に従事することができた。1973年から翌74年のことであった。時に岩本先生22、3歳。スクリーンにはスタッフとともに河合氏

の横に立つ若き日の岩本先生の姿が映し出されていた。

なお、先生の講演は、以上述べた1.「私がアフリカに行けた」（1973～1974）に続いて、2.「シカの個体数推定方法を考え出した」（1989年）、3.「動物行動シミュレーションプログラムを開発した」（2010年）と続くのであるが、これらの研究成果は先生が宮崎大学に勤務する中で上げられたものであろう。門外漢である私には先生の研究成果について誤りなく正確に紙面に紹介するだけの力がない。従って、ここでは省略することとする。興味・関心のある方は直接先生の論文等に就いて見られたい。

なお、私には先生が講演の「まとめ・参考」においてあげた言葉が、今も印象が深く、かつ感銘が深い。先生は学生に「自分の専門とは別の分野も持とう」と呼びかけられた。先生は自ら「パソコンお宅」と称し、スクリーンには「私のパソコンプログラム遍歴」を紹介している。そして事実、上記2、3の研究成果などは、先生が得意とするパソコン技術を駆使した延長上に成った画期的なものであった。先生の「自分の専門分野とは別の分野も持とう」という提言を、本校の学生は卒爾に受け取ってはならない。殊に本校のように、中学校卒業後ただちに特定の学科に属して、5年間クラス替えもなく同じクラスメイトと学校生活を共にする学生は、嫌でも閉鎖的な視野狭窄を免れない。先生のこの言葉は、本校の学生に対するいわば頂門の一針である。

先生は講演終了後、図書館での歓談中に本日の講演のメッセージが学生たちの心に届いたかをしきりに気にされていた。私はその言葉に先生のエducatorとしての片鱗を垣間見た思いがした。先生には宮崎大学副学長兼図書館長という激務、多忙中にもかかわらず、本校の学生のために非常に有意義な講演をしていただいた。講演時間がわずか45分と大変短く、先生には非常に申し訳ないと思っている。

(文責・望月高明)



# 今年度の活動と来年度の図書委員会について

学生図書委員長 電気情報工学科 仲 澤 知 剛  
副委員長 機械工学科 郡 勇 人

今年度は、学生図書委員会は様々な書物に触れて欲しいということを目標に、活動を行いました。主な活動として、テーマ展示・オープンキャンパスでの図書館開放イベント・ブックハンティング・「深山書評」の4つを実施しました。

テーマ展示では、図書委員が毎回到テーマを設け、図書館に所蔵されているものからテーマに沿った書物の紹介文を作成しました。テーマの項目は、いつもとは違った本を紹介する「小説以外の本」、ブックハンティングで選んだ本を紹介する「本探し書評」、寒い季節、部屋の中で読む切ない恋の物語を紹介する「寒空の下」です。上記のように様々な種類の本を計3回に分け、紹介しました。紹介文は冊子体に製本し、各学年・学科に配布しました。また、図書館入り口に設置されたテーマ展示のコーナーにも設け、できるだけ多くの方の手に取っていただけるように行いました。

オープンキャンパスでの図書館開放では、本校にお越しくくださった方々に本の紹介・閉架書庫ツアー・DVD上映・クイズラリーの企画を行いました。本の紹介では、中学生を対象に図書委員が「中学生におすすめしたい本」を紹介するものです。閉架書庫ツアーでは、普段立ち入る事ができない閉架書庫に入り、説明を受けながら見て回りました。DVD上映では、図書館に所蔵するDVDを使用し、休憩スペースとして利用してもらうことを考えて行いました。クイズラリーでは全問正解した方に図書委員が作成した菓子を配布しました。

ブックハンティングは、今年度も宮崎市の蔦屋書店で行われました。図書委員は事前に図書館に所蔵されていない本で購入を希望する本をクラスで調査しました。このクラスの希望図書と、図書館・学科に相応しい書物として図書委員が自ら書店で選書した本を購入しました。ブックハンティングで購入した本は、学生の目線から選出されていますので、是非一度は手にとって下さい。

深山書評は前委員長である榎田さんが発案したものです。「深山書評」はみなさんが図書館に足を運ぶ機会を増やし、より多くの本に触れてほしいという図書委員の強い思いから発案され、企画したものです。今回は昨年度の反省を活かして期間を決め、ポスターにも力を入れましたが、応募数があまり伸びませんでした。これらの反省点を来年度の図書委員に改善してもらいたいと思います。来年度は今年以上に頑張ってもらいたいものです。

## ブックハンティング実施される

平成26年9月27日(土)に、蔦谷書店宮崎橋通りにてブックハンティングを実施しました。

今年は17人の学生が参加しました。

ブックハンティングとは、各クラスの図書委員が図書館に並べてほしい図書、他の学生に読んでほしいと思う図書、クラスの学生からのリクエスト図書などを、大型書店で実際に選んでもらう選書ツアーです。学生は、各学科に関する専門図書や資格試験に関する図書、実用書など幅広い種類の図書を実際に手に取って、真剣に選書しました。

学生目線で選書された図書ですから、きっと皆さんの興味をそそる1冊が見つかるはずです。選ばれた62冊の図書は、新着図書コーナーのブックハンティング棚に配架しています。すぐに借りることができますので、ぜひ図書館へお立ち寄りください！

また、図書委員が選書した図書のブックレビューを作成し、各クラスに設置する予定です。そちらも、ぜひチェックしてみてください！

※詳細の内訳は、「ブックハンティング購入図書一覧」を参照してください。





## 第二回「深山書評」実施される

「深山書評」は、本校の学生が図書館に足を運ぶ機会を増やして、より多くの本に触れてほしいという図書委員の強い思いから発案され、2014年度から実施している、学生図書委員会主催の書評コンテストです。

二回目の実施となる今年度の「深山書評」には、2015年1月9日(金)の締め切りまでに、15名16篇の応募がありました。「この本と読んでみたい!」と思わせる、応募者の熱意のこもった作品ばかりでした。図書館長および学生図書委員から選出された5名の審査員で選考した結果、図書館長賞1名、優秀賞4名、優良賞4名の計9名の受賞が決定しました。受賞者および受賞作品については、各クラスに掲示してお知らせしています。

2015年2月4日には、図書館だいに第一閲覧室で表彰式を行いました。受賞者には、賞状と副賞として図書カードが授与されました。最後には、賞状を手に記念撮影を行いました。

今回の応募作品は、冊子にして各クラスに配布する予定です。ぜひ、読んでみてください。この書評を通して、学生のみなさんと本が、ひいては学生のみなさん同士がつながり、輪が広がっていくことを願っています。

この「深山書評」は、来年度も継続して行う予定です。今回、受賞を逃したみなさん、応募できなかったみなさんの力作を期待しています。



# ブックハンティングで購入した図書一覧

2014.9.27 実施

書名	著者名	出版社	請求記号
IT パスポート試験によくできる問題集；平成 26-27 年度	岩代 正晴	技術評論社	007.6  イッ   2014-2015
Git によるバージョン管理	岩松 信洋	オーム社	007.63  Git
リーダブルコード：より良いコードを書くためのシンプルで実践的なテクニック	Boswell Dustin	オライリー・ジャパン	007.64  Bos
たのしい Ruby	高橋 征義	ソフトバンククリエイティブ	007.64  幼ハ
やさしいレイアウトの教科書	大里 浩二	エムディエヌコーポレーション	021.4  サ
面白いほどよくわかる！心理学の本	渋谷 昌三	西東社	140  シブ
手にとるように発達心理学がわかる本	小野寺 敦子	かんき出版	143  オテ
遠回りがいちばん遠くまで行ける	有川 真由美	幻冬舎	159.6  アリカ
三国志の虚実	菅野 正則	新日本出版社	222.043  ラ
学年ビリのギャルが 1 年で偏差値を 40 上げて慶應大学に現役合格した話	坪田 信貴	KADOKAWA	376.8  ツバ
海上護衛戦	大井 篤	KADOKAWA	391.27  オイ
マンガでわかる構造力学	原口 秀昭	彰国社	501.34  ハク
世界の名建築 = Architectural masterpieces in the world	関田 理恵	パイインターナショナル	520.8  セイ
心がときめく間取りアイデア図鑑		エクスナレッジ	527.1  ココ
サスペンション・調律編	アオキシン	モーターマガジン社	537.98  アキ
ロードバイクオールカATALOG；2014		樫出版社	537.98  ロト   2014
これだけ理論	石橋 千尋	電気書院	540.79  デン  1
これだけ電力	山口 隆弘	電気書院	540.79  デン  2
これだけ機械	深見 正	電気書院	540.79  デン  3
これだけ法規	時井 幸男	電気書院	540.79  デン  4
Raspberry Pi クックブック	Monk Simon	オライリー・ジャパン	548.2  Mon
123 人の家 = Actus staff 123 homes	荒木 正則	アクタス	597  123
パリジャンのアパルトマン	ジュウ・ドウ・ポウム	ジュウ・ドウ・ポウム	597  ジュ
写真がもっと上手くなるデジタル一眼撮影 Q&A 事典 101：「上達のツボ」がひと目でわかる。	上田 晃司	インプレスジャパン	743  ウタ
ヨーロッパの装飾と文様	海野 弘	パイインターナショナル	757.023  ウツ
世界装飾図：[1]	Racinet A.	マール社	757  Rac  1
ビビリ	EXILE HIRO	幻冬舎	767.8  EXI
どうしていつも俺なんだ?!：悪童マリオ・バロテッリ伝説の真実	Worrall Frank	新潮社	783.47  Wor
判決は CM のあとで：ストロベリー・マーキュリー殺人事件	青柳 碧人	KADOKAWA	913.6  アヤ
論理爆弾	有栖川 有栖	講談社	913.6  アリス
輪(まわる)ピングドラム；中	幾原 邦彦	幻冬舎コミックス	913.6  イハ  2
輪(まわる)ピングドラム；下	幾原 邦彦	幻冬舎コミックス	913.6  イハ  3
ガソリン生活	伊坂 幸太郎	朝日新聞出版	913.6  イカ
アイネクライネナハトムジーク	伊坂 幸太郎	講談社	913.6  イカ
天地明察	沖方 丁	角川書店	913.6  ウツ
試着室で思い出したら、本気の恋だと思ふ。	尾形 真理子	幻冬舎	913.6  カ
彼女はカフェオレの夢を見る	岡崎 琢磨	宝島社	913.6  カサ  2
心を乱すブレンドは	岡崎 琢磨	宝島社	913.6  カサ  3
工場	小山田 浩子	新潮社	913.6  ホマ
アリス殺し	小林 泰三	東京創元社	913.6  コバ
ホリデー・イン	坂木 司	文芸春秋	913.6  ホサ
知らない映画のサントラを聴く	竹宮 ゆゆこ	新潮社	913.6  タミ
ハケンアニメ!	辻村 深月	マガジンハウス	913.6  ツツ
島はぼくらと	辻村 深月	講談社	913.6  ツツ
盲目的な恋と友情	辻村 深月	新潮社	913.6  ツツ
悲業伝	西尾 維新	講談社	913.6  シオ
悲痛伝	西尾 維新	講談社	913.6  シオ
悲惨伝	西尾 維新	講談社	913.6  シオ
悲報伝	西尾 維新	講談社	913.6  シオ
少女キネマ：或は暴想王と屋根裏姫の物語	一 肇	KADOKAWA	913.6  シマ
初恋は坂道の先へ	藤石 波矢	KADOKAWA	913.6  フジ
となりのユレーイ	藤咲 あゆな	インターグロー	913.6  フジ
三日間の幸福	三秋 縋	KADOKAWA	913.6  ミキ
カラスの親指	道尾 秀介	講談社	913.6  ミキ
N のために	湊 かなえ	双葉社	913.6  ミト
有頂天家族	森見 登美彦	幻冬舎	913.6  ミミ
ゲート：自衛隊彼の地にて、斯く戦えり；外伝参黄昏の竜騎士伝説編	柳井 たくみ	アルファポリス	913.6  ヤイ  S3
SF JACK	新井 素子	角川書店	913.68  SF
シャーロック・ホームズ神の息吹殺人事件	AdamsGuy	竹書房	933  Ada
ゴジラ	Cox Greg	KADOKAWA	933  Cox
夜のサーカス	Morgenstern Erin	早川書房	933  Mor
ロリータ	Nabokov Vladimir Vladimirovich	新潮社	933  Nab

# 図書館からのお知らせ

## 図書館開館予定について

今年度の夜間開館は、平成27年2月27日(金)までです。  
次の期間は、平日のみ開館します。

期 間：平成27年3月3日(火)～3月31日(火)

開館時間：9時から17時まで

(なお、平成27年度の開館予定は、4月2日(木)の開始予定です。)

## 学年末・春季休業中の長期貸出について

通常10日間の貸出期間を学年末並びに春季休業中は、長期貸出とします。

貸出開始日：平成27年2月18日(水)～4月3日(金)

返 却 日：4月6日(月)始業式

帯 出 冊 数：一人7冊まで



## 図書館長の交代について

最後に、皆さんにお知らせです。平成27年4月に、図書館長が望月先生から西村先生へ交代となります。望月先生には、8年の長きに渡り図書館のためにご尽力いただき、感謝の念が尽きません。本当にありがとうございました。

## 編／集／後／記

図書館だよりNo.76をお届けいたします。

今回の図書館だよりには、本年度をもって退職される小藪先生、板倉先生、崎山先生から玉稿をお寄せいただきました。読書を始めるきっかけや、図書館へ通うきっかけは様々ですが、原稿を読ませていただいて、高専の図書館が学生のみなさんにとっての「きっかけ」になればと改めて思いました。ご多忙中のところご協力いただきました先生方には、この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

例年実施している校内読書感想文・体験記コンクールの入賞作品を掲載しました。入賞作品は1年生～3年生の作品から選ばれた力作揃いで、昨年12月の全校集会で表彰されたものです。ご多忙中、学生の読書感想文をご指導下さいました国語科の先生方に厚くお礼申し上げます。

1年生対象の講演会では、講師に岩本俊孝氏(宮崎大学副学長・図書館長)をお招きしました。演題は「動物行動のシミュレーション」で、この分野の研究に至った経緯と体験談をご講話いただきました。先生はシミュレーションプログラムを開発されましたが、開発のために動物行動のデータを収集するには、相当のご苦勞があったと痛感しました。学生は、普段耳にすることのない研究分野の体験談に、ジッと聞き入っていました。

春季休業を迎え、これから暖かくなりますね。ジッと読書していても苦にならない季節です。春休み中も図書館は開館していますので、春の陽だまりの中、静かな図書館で是非読書に励んでください。皆さんのお越しを、スタッフ一同待っています！